商品開発部・育児グッズ課　サンプル

部長×平
年の差(37×19)・リーマン・職場・オムツ・おしゃぶり・哺乳瓶・兜合わせ・お世話・排尿・羞恥・嘔吐・剃毛

大スカはありません。

「失礼します。商品開発部の都築です」
深紅の絨毯が敷かれた社長室。都築が入室すると、普段ほとんどこちらに来ることのない上条社長が腰を上げた。律儀に腰を折り、深々と頭を下げる。
「お忙しいところお呼び立てして申し訳ありません。折り入ってお願いがありまして」
「何でしょうか」
立ったまま話を聞こうと思っていると、嫌味なほどに長い指が上条の向かいのソファを示した。
「どうぞお座りになってください」
「失礼します」
いったい何の用だろうか。ここに来るまで想像を巡らせてみたけれど、思い当たることは一つもなかった。何か都築の知らないところでトラブルでも……と思っていたけれど、お願いというのだからそういった類のことではないだろう。
(それとも厄介なトラブル処理か――?)
開発関連ならかまわないが、それ以外の仕事は受けたくない。そのときは毅然とした態度で断ろうと顎を引いて上条の目を見据える。しかし上条の口から告げられたのは、トラブルでもその処理でもなかった。
「少し前に保育園をつくったことをご存知でしょう」
「はい。確かエイジプレイ専門の」
保育園の名前までは思い出せなかった。確かひらがな四文字――そこまでしか覚えていない。
「ええ。実はそこで使うグッズを都築さんに開発していただきたいんです」
「私に……ですか」
どうして直接言うのだろう。わざわざ呼び出さずとも、いつもどおり業務命令として出せばいいのに。
「はい。ただ少し特殊なので……無理そうでしたら断っていただいてもかまいません」
「まずは概要をお聞かせください」

断れないとわかっていながら――しかし特殊だとか難しいだとか、そういうことを言われると血が騒ぐ。もしかしたら上条は都築のそうした性格を知った上で言葉を選んでいるのかもしれないが。

「エイジプレイ専門なので、開発していただきたいのはオムツや哺乳瓶のような赤ん坊が使うグッズなんです」

今までに扱ったことのないジャンルだった。プライベートでの経験もない。

それからしばらく上条の話――商品内容はすべて都築に任せるということ、ゆくゆくはエイジプレイ専門の通販サイトを立ち上げたいと思っていることなど――を聞き、おおまかな説明が終わったところでこちらから切り出す。

「社長、失礼ですがどうして私に直接？」

「絶対に失敗してほしくないからです。人選は都築さんにお任せします」

「誰でもよろしいんですか」

「かまいません。私に伝えていただければ、こちらから辞令を出しましょう」

そこまで言うのなら――しばし口を閉じ、エイジプレイを想像してみる。特に嫌悪感はない。しかし具体的に何がどのように必要なのか、すぐには思い浮かばない。

「部署の開設は一か月後。それまでにエイジプレイについて調べ、引き抜きたい人材をピックアップしてください」

一か月――やるべきことや流れを考え、使えそうな人間を探すというには短すぎる。しかも今回は社長直々の命。それでなくてもスカトロ関係は嫌悪感を覚える者も多いので、人選は慎重にしなければならない。

「二週間後、またこちらに顔を出していただけますか」

「わかりました。進捗をお伝えに参ります」

都築の返事に、上条は満足げに頷いた。

「期待しています。必要なことがあれば私に直接ご連絡いただいてかまいません」

プレッシャーはない。しかしそこまで上条が力を入れると言うなら失敗は許されない。それでも不安より、やりがいの方が何倍も大きい。

「承知しました。よろしくお願いいたします」

※　※　※

「三上、これ明日まで」

「え……」

「何？」

「いえ……明日の何時ですか？」

「明日までって言われたら明日の始業前までってわかるだろ」

デスクに置かれた紙の束。たくさんの領収書。

（何か月分……？）

視線を上げると、仕事を押し付けてきた先輩はすでに自分のデスクに戻っていた。
（終わるかな……）
内心ため息をつきながら、デスクの左側に重ねられた書類の束を見る。
（まあ残業代がちゃんと出るからいいか……）
むしろ残業代がないと困る。かといって連日連夜の残業はかなり体にこたえていた。
（ちょっと休憩……したら間に合わないか）
高卒で入社して一年と少し。三か月でこの部署の業務のほぼすべてを叩き込まれ――当時は仕事だからそれが当たり前だと思っていたけれど、実際には先輩が楽をしたいがために、新入社員には不要な業務も教えていたということがわかった。しかしそのおかげで自分の能力は上がったと思う――誰に感謝されるわけでもないけれど。
不平不満を思い浮かべても仕方ない。どうせ先輩に直接言えるわけでもないし、三上に何か言われたところで心を入れ替えるような人でもない。
溜まった書類を一つ一つ見返しながら、締め切りの早いものから順に並べ直す。とりあえず、今渡された明日の始業までというのが喫緊の業務だった。
思わずため息を漏らしてしまった瞬間、すぐ後ろから経理部長の声が聞こえた。
「三上くん」
――やばい。ため息が聞こえてしまったのだろうか。振り向きたくない。この人は先輩の仕事の押し付けを見て見ぬふりをしているのだ。
しかしこれは仕事――三度頭の中で唱えてから振り返る。
「はい。何でしょうか」
確かに背後を通ったはずなのに、部長は立ち止まることなく窓際の自席に着いた。慌てて追うようにして正面に立つ。
「君、異動ね」
「え？」
「異動。明日付け。今から全部引き継いで」
「明日……ですか」
入社からずっとこの経理部にいたので、異動というものがそんなに急なものなのかはわからないけれど、たった今押し付けられたばかりの書類を先輩に戻すことはできないし、かといって他の人に割り振るにも絶対にいい顔をされない。
「新しい方は――」
「入らない。いや、いつかは入るだろうがまだ先になる。だからとりあえず、今ある仕事は全部他の人に割り振って」
もう話は終わりと言わんばかりに、部長はくるりと椅子を回転させ、ブラインドが閉じたままの窓を見上げた。下手な話の切り上げ方。しかし今はそんなことを考えている暇はない。
（どうしよう……）
しかし命令されたのだからやるしかない。それに今の話は全員の耳に入っただろう――振り返り、室内を見回す。しかし全員が慌てたように三上から視線を逸らし、あきれてしまう

ほどわざとらしくパソコン画面を睨みつけた。
（普段からそれぐらい仕事したらいいのに……）
仕事のほとんどを三上に押し付けている先輩までも、忙しそうなふりをしている。メールを一通返すのに三時間もかけるような人なのに――いや、だから、か。
「三上、俺が引き継ぐから」
そう言って手を上げたのは、同期の矢島だった。
「でも矢島、これ以上は無理でしょう」
矢島の隣に立つと、三上と変わらない量の書類がデスクに重ねられている。
「いいから。やばいとなったら俺から誰かに引き継ぐし、とにかく今日中に引き継ぎを終えないとまずいだろ」
入社式から話すようになった矢島は、同じ経理に配属されたことを喜んでくれた。三上自身も心強かったし、時間があれば一緒に昼食を食べ、ときに少し離れた公園まで行って愚痴を言い合った。
そして、矢島はいつも三上を助けてくれていた。仕事を覚えてからは帰りがけに書類を押し付けられるのはしょっちゅうで、一人じゃ大変だろうと一緒に残業してくれたり、昼休み返上で仕事を手伝ってくれたりもしていた。
「――ごめん」
すでに矢島は三上に与えられた仕事をいくつか手伝ってくれている。それでなくても矢島自身の仕事もあるのに――しかし誰を見ても目も合わせてもらえず、「話しかけるな」というオーラが漂っていた。
「いいから」
「……ごめん」
書類を持ってこようかと思ったけれど置き場所が足りそうになかったので、矢島にデスクに来てもらうことにした。

※　※　※

（ええと……ここか）
異動先と言われて渡された書類には「商品開発部・育児グッズ課」と書かれていた。しかし聞いたことがない――一階の受付で尋ねると、どうやら今日付けで新設されたらしいことがわかった。
（そこまで説明してほしかったな……）
しかし経理部長にそこまで求めても無駄だろう。直接的ではない方法で三上を困らせ、先輩とともに楽しんでいたのだから。
告げられた場所は、同じビルの十階にあった。重役の使うフロアのすぐ下の階。だからといって重役が通るわけでもないのに、少し緊張してしまう。
辺りはしんとしていた。どうやらこのフロアは使われていないらしい。誰一人おらず、話

し声も聞こえてはこない。
なぜこの課だけがここにあるのだろう。開発部のフロアに空きがないのだろうか。
すりガラスさえないグレーのドアをトントンと軽く二回ノックする。反応はない。誰もいないのだろうか……ゆっくりとドアノブを回すと、軽い音を立ててドアが開いた。
「失礼します」
中には誰もいなかった。ホッと息を吐き、室内を見回す。
(あれ……？　ここだよな)
課とついていたので、当然のように個人にデスクが与えられるものだと思っていた。しかし室内には大きな長方形のテーブルが一つと、椅子が四脚、そして左奥に大きなホワイトボードが一つ置かれているだけだった。
まるで会議室。間違えただろうかと、プレートの確認のために一度外に出ようと踵を返したときだった。
「三上」
振り向くと、ホワイトボードの裏から体格のいい男性が姿を現した。
(え……都築部長?!)
「どうした」
「あ、い、いえ！　今日からお世話になります。三上です。よろしくお願いいたします」
(どうして都築部長が?!)
都築部長は商品開発部の部長で、入社直後からずっと開発畑を歩んできた人だ。社内でも社長の次に有名な人。手掛けた商品は次々に大ヒットを飛ばし、部長にかかれば日本のアダルト産業を変えられるとまで言われている。
「都築だ。よろしく頼む」
「よろしくお願いします」
頭を下げると、椅子に座るように促された。下座を意識し、ドア側一番手前の椅子に腰を下ろす。
「早速だが――」
「あ、はい」
「ＮＧプレイは？」
「え……？」
「ＮＧプレイ。スカトロがだめとか、ＳＭはだめとか」
「あ……いえ……多分ないと思います」
実際に自分がするわけでもないし、これといって嫌悪感を覚えるようなプレイはない。さすがに食糞は想像でも無理だけれど――。
(言っておいた方がいいか……)
「そうか」
「あ、いや、すみません、その……しょ、食糞は苦手です」
一度「ない」と言っておきながら、自分の言葉を覆した。部長と会うのも話すのも初めて

だけれど、噂になるほどできる人なのだから、きっと自分にも他人にも厳しいのだろう。
（早速怒られる……）
それでも言わないよりはマシだったと自分に言い聞かせ、目を閉じて顎を引いて罵声に備える。
しかし、想像していたような反応は返ってこなかった。
「ああ……それはここでは使わないから大丈夫だ。聞いていると思うが、これからここで、エイジプレイに使われる育児グッズの開発を行っていくことになる。さすがに子供相手に食糞はさせないだろうし、それが苦手でも問題はない」
「あ……はい、わかりました……」
言われてみればそうだ――しかしそれより、怒られなかったことが意外だった。もしここが経理部だったら、先輩からの罵声が飛んでいただろう。
三上が思わぬ反応にあっけに取られていると、部長がホワイトボードの前に立った。
「育児プレイと聞いて思い浮かべるグッズを片っ端から挙げてみてくれ」
「え……」
もうこれは仕事が始まっているということだろうか。まだ自己紹介の途中だと思っていたけれど――というか、他のメンバーはどうしたのだろうか。
「あの、質問をよろしいでしょうか」
「なんだ」ホワイトボードに「グッズ」と書いていた部長が三上を振り返った。
「もう全員外に出ているんですか」
「全員？　外？」
「他の方です。情報収集とか……」
「いや、とりあえず今この部署にいるのは俺と三上だけだ」
「二人……?!」
さすができる男は違う。しかもまだ入社一年、開発未経験の三上と二人だけで新設部署を任されるなんて。
「そうだ。知ってのとおり、この部署は今日から始まる。だがまだ何一つ決まっていない。俺と三上がいるということだけだ」
「はあ……」
そんな状態で新設されたということなのか。それとも「新設できるかどうかを見極めるための期間」が今日からということなのか。
「何から着手するかも決まっていないし、どういうふうに動いていくかも未定だ。完全に手探りの状態だが、二人でやればなんとかなると思っている。途中人手が足りなくなれば他から人員を補充するし、激務にならないよう調整するからよろしく頼む」
「あっ！　いえ、はい、よろしくお願いいたします！　頑張ります」
部長がこんな謙虚な人だとは思わなかった。部下に頭を下げるなんて――経理部長とは大違い。
「だからまずどんなグッズがあるかを挙げていって、そこから何をどう大人向けに改良する

のか、それが売れるのか、価格はどうするか、販売方法は――とまぁ、とにかく一から十まですべて俺達が決めていくことになる」

（すごい……）

ものすごく大変な仕事だ。なのに部長はとても楽しそうに見えた。

「立場は俺が上になるが、言いたいことは遠慮せず何でも言ってほしい。違うと思ったらすぐに違うと言ってほしいし、俺も言う。遠慮していてはいい商品はできないからな」

「わかりました。ありがとうございます」

下げた頭を上げると、部長は不思議そうな表情を浮かべていた。

「あの……？」

「ああ、いや、お礼を言われるのが不思議だったから。商品開発部では若手から古手まで、全員がまるで喧嘩しているかのようにやっていたんだ」

「そうなんですか……」

すごい部署だ。経理部では絶対に考えられない。そもそも誰かが言葉を発するなんて、何かの確認か頼み事か……その程度だけだった。常にピリピリしていて、物を落とすだけで舌打ちをされるようなところ。

「――で、今さらだがエイジプレイの経験は？」

「いっ、いえ！　ありません っ」

「そうか。俺もまだ初心者なんだ。だが嫌悪感はなかったし、よくよく調べてみると意外と面白そうでな。楽しみながらやっていこう」

「は、はい、よろしくお願いいたします！」

楽しみながら――できるだろうか。

（それに僕だけなんて……）

これまで商品開発なんて一度もしたことがないのに、部長の邪魔をしてしまわないだろうか。もちろんやるからには一生懸命やるつもりでいるけれど、開発のノウハウなんて何一つ持っていない。

「他に何か質問は」

「いえ……」

どうして私だったんですか、と思わず訊きそうになった。だって経理しか経験がないのだ。しかもエイジプレイの経験も、子育ての経験もない。

なのにどうして――しかし少し考えてみればすぐにわかった。きっと三上は、本来は部長だけで十分な新設部署に捨てられたのだ。三上は経理にとってもいらない存在だったのだろう。これまでたくさんの仕事をこなしてきたつもりだったけれど、仕事を押し付けるという存在価値よりも、一緒にいるだけでイライラするというようなネガティブな感情の方が勝ったということだ。しかし、追い出そうにも他に受け入れてくれる部署がなかった。そこで新しく部署ができると知って、ここぞとばかりに押しつけた――まるであの、端々の破れた領収書のように。

「では何か訊きたいことができたらいつでも訊いてくれ。さて必要な育児グッズだが――」

「は、はい！　すぐに思い浮かぶのは哺乳瓶です。それからオムツでしょうか」
それなら、もう捨てられてしまわないように頑張るしかない。それに商品開発部の誰もが憧れる部長と仕事――開発の仕事を自分がすることになるとは思ってもみなかったけれど、せっかくだからできる男の仕事ぶりを盗んでみたい。
「そうだな。それが一般的なイメージだと思う。その二つは当然大人用のものを販売するつもりでいる。他には何か浮かぶか」
（他……）
いったい何があるだろう。育児グッズなんて考えたことも調べたこともない。しかし赤ん坊といえば――赤ん坊？
「はい」
手を挙げると、部長がわずかに目を細めた。
「どうした」
「対象の年齢は何歳ですか」
「対象？」
「エイジプレイといっても、生まれたての赤ん坊から幼児、子供……といろいろあると思うんですが」
「ああ……そうだな。言われてみればそうだ。すっかり赤ん坊が対象という気持ちでいてしまったよ」
部長が嬉しそうに笑う――それでピンと来た。
（試されたな……）
部長が「エイジプレイ」の広さに気付いていないはずがない。三上がどこまで気付けるのか試したのだ。
「対象はさまざまだ。ひとまず三歳程度を目安として、それまでに必要なグッズを揃えていこうと思っている」
説明が始まると判断し、急いでカバンからメモ帳を取り出す。拗ねていては置いていかれる。
「すみません、周りに子供がいないので、三歳がどれぐらいの子供なのかを確認してもよろしいでしょうか」
「もちろん」
部長がペンのキャップを閉めた。カチッという小気味いい音を立てたそれを置き、三上の正面に座る。
「まだパソコンの支給が……そろそろ届くと思うんだが」
「では携帯で……」
社内Ｗｉ-Ｆｉが繋がっていてよかった。
携帯を取り出し、「子供の成長」と入力する。するとすぐに「子供の成長カレンダー」というものが表示された。
「三歳はオムツが外れる頃なんですね」

内容を目で追ってから顔を上げると、なぜか部長は三上の顔をじっと見つめていた。
「あの……？」
調べないのだろうか。それともすでに頭に入っていて、また三上が何かに気付くのを待っているのだろうか。
（うう……やりにくい……）
経理部から抜けられたのは幸いだったけれど、こうして試されているとわかりながら働くのは精神的にきつい。
「いや……突然こんな部署に呼ばれたというのに抵抗がないんだなと思って」
「え……？　ああ……私は与えられた仕事をするだけですから」
だからどこの部署だろうと関係がない。どこだろうと頑張る。
――じゃないと、居場所がなくなってしまうから。
「そうか。頼もしいな。だがここではなるべく仕事と思わず楽しんでもらいたい」
「楽しむ……ですか」
「そうだ。エイジプレイに興味のない人間が作ったものより、積極的に楽しむ人間が作ったものの方がいいものを作れるだろう」
「……そうですね」
思わずそう返したものの、エイジプレイに興味を持てる気はしなかった。
（オムツ替えかぁ……）
赤ん坊のならいいかもしれないけれど、大の大人のオムツを替えるなんて。
「三上、恋人はいるか」
「いえ……いませんが」
こういう質問をされるのも想定のうちだ。経理では関係がないので訊かれることはなかったけれど、アダルトグッズも作っている会社なので、業務とセクハラの線引きが難しい。
「これまでに付き合った人数は？」
「いえ、いません」
これを答えれば童貞ということまでバレてしまうけれど仕方ない。どう考えても部長は興味本位で訊いているようには見えないし、何よりあの「エース都築」だ。何を考え、どこに新商品のヒントを見出そうとしているのかわからない。
「そうか」
この後に部長の自己紹介が始まるのかと思ったけれど、部長は満足げに頷くだけで自身の携帯を取り出した。どうやら検索を始めたらしい。掴みどころがない。しかし経理部に比べれば――比べ物にならないくらい、過ごしやすい。
「――三歳頃にオムツが外れるということは、トイレトレーニング用のグッズもあった方が良さそうですね」
「そうだな」
先ほどから部長は三上の話を聞く一方で、自ら発言しようとはしていない。やはり能力を見極めようとしているのか――異動早々ここでも不要と判断されるのは恥ずかしい。いくつ

ものページを手早く流し見て、キーワードを拾っていく。
「あとはおしゃぶり……私が書いてもよろしいでしょうか」
そもそも立場が下である三上が書記を務めるべきだった。立ち上がってペンに手を伸ばすと、部長が頷く。
「助かるよ。俺はあまり字が上手くない」
ホワイトボードを見ると、男性らしいながらも丁寧な字が並んでいる。上手くないというのは謙遜だろう。それか自信がないのだろうか。これでも十分きれいなのに――きっと他のことができすぎて、「できる」の基準が高すぎるのだろう。
「部長の字はとてもきれいだと思います。私の字で読めないところがあったらご指摘ください」
部長が頷くのを見届けてから、今携帯で見たばかりの単語を一つ一つ書き込んでいく。
おしゃぶり、歩行器、メリー、離乳食グッズ、粉ミルク、母乳、絵本、オマル、おしりふき、ぬいぐるみ……覚えているのはそこまでだった。ペンを持ったままもう一度携帯を確認し、ぬいぐるみの隣から続ける。ベビーカー、チャイルドシート、ストロー付きマグ、よだれかけ。
今調べたところで出てきたのはこれくらいだった。しっかり読み込めばもっと細かいグッズも出るのだろうが、メジャーどころはこの程度だろう。
「他、部長から何かありますか」
「いや、俺もこれくらいだと思うよ。たくさん出してもらって助かった。じゃあとりあえず買い物に行こうか」
「え？」
部長はホワイトボードを写真に収めると、キーケースを掲げた。
「とりあえず、ドラッグストアだな」

〜〜〜〜

翌日――。
「おはよう。早いな。体調はどうだ」
「おはようございます。大丈夫です。昨日はご迷惑をおかけしました」
体はひどくだるかった。けれどそんなことは言っていられない。働かないと。それにもう居場所を失いたくない。
深々と下げた頭を上げると、室内の変化に気が付いた。机に、いつの間にかパソコンが二台隣り合って置かれている。
「席はどこでもかまわない」
「お隣、失礼します」
一緒に雑誌を見たり、相談したりするには隣の方が都合がいい。広い部屋の中で、二人でこじんまりと隣り合って座るというのもなんだか不思議な感じだけれど。

「ロッカーも来たぞ」
「どこですか」
室内を見回してもそれらしきものは見当たらない。
「奥のロールプレイルームだ。これからはあちらで過ごすことが多くなるから」
「そうなんですか」
部長の中ではどのように物事を進めていくかのイメージが浮かんでいるのだろう。けれど三上の中にはまだ何もない。
「パソコンの設定はできてる。もう使える」
「すみません。ありがとうございます」
パソコンの設定なんてしたことがないから助かった。それにしても部長はいったい何時からここにいるのだろう。
（これからはもう少し早く来たほうがいいかな）
経理部のときと同じ時間に着いたけれど、部長は夜残業より朝残業タイプなのかもしれない。
ノートとペンを出し、テーブルの端に積まれていた本を取る。昨日読めなかった本をと思っていると、部長の視線を感じた。
「……あの？」
「もう仕事するのか」
「はい。あ、何か仕事がありますか」
「いや、まじめだなと思って。じゃあ昨日の報告からいいか」
「お願いします」
「昨日俺が行ったのは『ゆうあい保育園』というところだ。エイジプレイ中のパートナーを預かる場所」
「預かる……ですか」
「そうだ。仕事中はパートナーの世話をすることができないだろう。だからその間預ける。普通の保育園の大人バージョンというところだな」
「そんな保育園があるんですね」
「うちの系列だぞ」
「え、そうなんですか」
まったく知らなかった。経理をしていたのに名前も聞いたことがない。
「いろいろやってるからな。それに特殊な場所だし、俺の周りでもあまり話題に上ることはないな」
人付き合いの多そうな部長でさえそういう印象なら、なおさら三上のところにその話題が持ち込まれることはなかっただろう。それがわかっているからか、部長の声色も責めるようなものではない。
「それで、必要なものや不便なことを聞いてきた」
「はい」

ペンを構え、改めてメモの姿勢を取る。
「やはり俺達が考えていたように、哺乳瓶やおしゃぶりのサイズが赤ん坊用だと合わないらしい」
哺乳瓶、おしゃぶり、サイズ合わない……とメモをする。
「歯がぶつかることも問題だ。中には抜歯している子供もいるようだが」
「抜歯？　……ですか」
部長の言う子供とは、エイジプレイで赤ん坊役をしている人ということだろう。子供――本当は大人なのに、エイジプレイをしているとこうも簡単にそう呼ばれてしまうのか。
「すべての歯を抜いてしまっている子や、アキレス腱を切断して歩けない状態の子もいるらしい」
言葉が出なかった。だってそんなの、人生が変わってしまう。歯をなくすことも、歩けなくなることも。
「それが幸せなんだよ」
「幸せ……ですか」
そうなんだろうか。歯がなければ食べられないし、歩けなくなったらどうやって生きていくのだろう。
（そこまでしちゃうほどエイジプレイが好きってことかな……）
「あ、じゃあ赤ん坊用の車椅子も必要でしょうか」
「車椅子？」
部長は怪訝そうな顔をした。「どうして車椅子が出てくるんだ？　赤ん坊は車椅子を使えないだろう」
「でもアキレス腱を切ってるんですよね？」
言いながら、車椅子ではなくベビーカーという言い方をすべきだったことに気が付いた。
「すみません、車椅子ではなくベビーカーですね。ベビーカーは必要になりませんか？　大人が乗れるサイズの」
「それは難しいところだな。保育園に預けることはあっても、本当に赤ん坊として外を散歩するわけではないし……どちらにしてもアキレス腱が切られているからといって、必ずしもそういうものが必要になるというわけではないだろう」
「じゃあどうやって生活するんですか？　日常生活だって……」
まさか室内を這って移動するのだろうか。でも立ち上がることもできなければ、掃除や洗濯といった家事もできないだろうに。
どうにも生活の様子を感じとることができずにいると、考え込むような表情をしていた部長が合点したように頷いた。
「そうか、三上はまだエイジプレイがどのようなものか理解していないんだったな」
（あ……）
また失敗してしまった――そう思ったのも束の間、部長がふっと優しく笑った。
「あとでしてみよう。まずはどんなプレイなのかを知るところから始めないとな」

〜〜〜〜

ミルク作りは二人ですることになった。二人とも作るのは初めてということで――そのときふと、部長には子供がいないんだろうかと思った。単に母乳だけで育てたのかもしれない、でもいないかもしれない――なぜか部長の奥さんや家族のことが気になってしまう。そんな自分の気持ちをごまかすために口を開く。

「粉が固まったキューブタイプもあるようですね」

「確かに毎回測るのは……手にしたスプーンを缶に戻してしまうのも気になるな。だが『手間』という表記は使えない。それなら衛生面で押そう」

つまり、キューブタイプの製造も検討してくれるということだろう。思い付きや、ただ知っていることを口にするだけでも部長はきちんと拾い、考えてくれる。

（嬉しい……）

ずっとここにいたい。部長と二人で仕事をしていきたい。

「……溶けたな」

「おそらく……」

瓶の底を二人で覗き込む。しかしミルクに色があるので、底に溜まっているのかどうかはよくわからなかった。

「赤ん坊用のものだし、溶け残りができるようなものではないだろう」

同意して頷くと、部長が哺乳瓶を流水にさらした。

「これも手間だな」

「……そうですね」

手間という表現は使えないけど、と心の中で言葉を足す。

「実際に飲むのは大人だし、沸騰させたお湯を使わなくて済む方が楽でいいな。飲むのに適した温度で溶け、そのまま飲める方が」

「四十度くらいでしょうか」

「好みによるが……哺乳瓶だと飲むのに時間もかかるだろう。それだと飲み終わる頃には冷めていそうだ」

「あとで、粉が何度以上で溶けるのか調べておきます」

「ありがとう」

部長が水栓レバーを上げた。哺乳瓶の水気を切り、手の甲にミルクを数滴垂らす。

「部長？」

「温度の確認だ」

続いて哺乳瓶に触れ、それから三上の頬に哺乳瓶を押し当てた。

「わっ」

「熱くないか？」

「あ……」

（確認させてくれたのか……）
なんだか大事にされているみたい。そう思ったら、胸の辺りに不快感を覚えた。吐き気がする……。
「大丈夫か」
「はい。すみません、少し緊張してしまって」
「大丈夫だ。最初はただミルクを飲むだけだ」
「はい」
「温度はいいな？　さぁ、ベッドへ」
先に部長がベッドに座った。しかし近付いてもどうしたらいいかわからない。どうしたものかと考えていると、部長が膝を叩いた。それから手を伸ばされる。
「おいで」
ふらりと近付くと、手を引かれた。その力に身を任せると、太ももの上に頭をのせる形で寝かされる。
「スーツで膝枕というのも変な感じだな。これからは私服にするか」
「え」
「別に客や取引先と会う仕事じゃないんだ。かまわないだろう」
（自由……）
きっと開発部は完全実力主義なのだろう。結果さえ出せれば他の事はどうでもいいみたいな。そして部長はそれが許される力のある人。
「さあ三上、ミルクの時間だ」
唇に乳首が当てられた。熱いかと思っていたけれど、それはほんのりと温かい。
乳首を咥えると、急に部長の視線が優しくなった――それを見た途端、激しい吐き気を催した。無意識のうちに下を向き、口元を押さえる。
「うっ」
「大丈夫か！」
「すみませ……」
昨日の昼から何も食べていないので、戻すことはない。しかしなかなか吐き気は治まらない。
「我慢するな、全部出せ」
「うう……」
どうしよう、どうしよう。まさか部長の膝の上で吐きそうになるなんて。
「大丈夫だ。何も気にしなくていい。全部吐いたら楽になれる。もう少し頑張れ」
きっと部長は三上が吐くのに耐えていると思っている。昼休憩の後なのだからそれも当然なのだけれど、食べてないから何も出そうにない。
「うう……」
胃液を含んだ酸っぱい水分だけが口内にあふれる。口からこぼれてしまわないよう、必死に飲み込む。

「……もしかして、今日何も食べてないのか」部長が背中を撫でる手を止めずに言った。
（どうしよう……）
頷けば体調不良で食べていなかったと思われるだろう。健康管理もできないやつだと思われる。しかし返事をしないのは失礼だし、本当のことも言えない。何より固形物が出るまで背中をさすられ続けるのもつらい。
酸っぱい唾液を飲み込み、おそるおそる口を開く。
「――もう大丈夫です。すみません」
本当は全然大丈夫じゃなかった。部長の手の優しさを感じる度に強い吐き方がこみ上げてくる。しかしこのままではきりがない。吐き気が強くても、吐くものは何もないのだから。
「……申し訳ありません」
声がガラガラだった。
「気にするな。それよりそんなに体調が悪かったのか。気付かなくてすまなかった」
「違っ……」
「三上？」
「すみません……」
「大丈夫だ。さあ、少し横になりなさい」
「あ……でも……」
「気にするな。赤ん坊が吐き戻すのはよくあることだ」
優しいまなざしと声。その気遣いは嬉しいのに、申し訳ない気持ちの方が大きくて、そう思ったらまた吐き気がこみ上げてきた。
「っ……」
でも吐くものは何もない。とめどなくあふれ出る唾液を飲み込んで、何事もないふうを装う。
「スーツを脱ごう。楽な格好で横になりなさい」
そう言いながら、部長の手が三上の首元に伸びた。
「っ！」
そのとき突然感じた恐怖心。咄嗟に身を庇うようにうずくまると、部長の戸惑った声が聞こえた。
「三上……」
その声で、我に返った。
「あ、申し訳っ――」
「――すまない。驚かせたな」
「いえ、すみません……」
体勢を戻し、部長に向き直って頭を下げる。
動悸がした。自分でもどうしてこんなに怖くなったのかがわからない。
「赤ん坊は……産まれてすぐはあまりよく目が見えないから、突然触られたら怖いな」
「あ……」

それは、部長の優しさだった。本当は言いたいこともあるだろうに、三上を赤ん坊として扱い、気にしていないふりをしてくれている。

「ジャケットは脱げるか」

ゆっくりゆっくり、部長の手が三上の肩に触れた。様子を窺いながらそっと脱がされる。

「大丈夫。いい子だ」

「あ……」

部長に優しくされる度、なぜか不快感を覚える。触られること自体に対してではなく、胸の辺りの不快感。もやもや、ムズムズして気持ち悪い。

「部長……」

「ほら脱げた。ネクタイとシャツとズボンは自分で脱げるか」

「はい……すみません」

「謝ることはない。赤ん坊は何もできなくて当然だからな」

「っ……」

そこでようやく、赤ん坊扱いされることが苦手なのだとわかった。しかも、愛されていると感じてしまうような態度を取られるとだめらしい。

しかしこれは仕事だ。今日がだめでも、結局明日以降にまたロールプレイをすることになる。だから赤ん坊扱いが苦手だなんて言うことはできない。

理由がわかって安堵したのに、胸の辺りが苦しくなった。吸っても吸っても酸素が肺に入ってこないような。

（なんで――）

経理部では、こんなこと一度もなかったのに。

「三上、怖くない」

「え……？」

「人間なんだから、体調を崩すこともある。異動してきてすぐだと気になるかもしれないが、逆に異動で緊張していたからかもしれないだろう」

「あ……」

優しい。でもこれ以上優しくしないでほしかった。具合がどんどん悪くなる。

「少し寝ておけ。俺は隣の部屋にいるから、何かあれば携帯を鳴らしなさい」

「いえ……その、本当に大丈夫です」

辺りを見回すと、哺乳瓶はいつの間にかヘッドボードに置かれていた。手に取ると、もう冷たくなっている。

（作り直した方がいいのかな……）

しかしどうせ飲むのは三上だ。別に冷たくても――でも味の感覚が違うかもしれない。

「無駄にしてしまってすみません。冷めてしまったのでもう一度作ってきます」

「三上」

「っ……」

ぴしゃりとした声だった。思わず体がびくっと止まる。

「……すまない。だが無理はしなくていい」
「無理なんてしていません」
本当は手が震えそうだった。ぎゅっと強く哺乳瓶を握ることでごまかし、気付かれないように深呼吸を繰り返す。
「……わかった。でも赤ん坊は寝ていなさい」
「あ……」
（また赤ん坊って言われた……）
ずっと子供扱い。赤ん坊だから何もしなくていい、何も気にしなくていい、という意味なのだろう。そうやって庇ってくれている。
（優しい……）
キッチンに立つ部長の背中を見つめる。本当に優しい人――なのにどうしてこんなに具合が悪くなってしまうのだろう。
（でも次こそちゃんとしないと……）
次が最後のチャンスだろう。これで失敗したら――。
（怖い……）
自分の体なのにコントロールができない。こんなに頑張りたいと思っているのに、勝手に体が拒絶反応を起こしてしまう。
部長が温度の確認を終えたようだった。手と哺乳瓶を拭いて、こちらに戻ってくる。
「部長……」
「大丈夫か」
「はい。すみません」
（今度こそ……）
恐怖心は消えないけれど、頑張りたい。
部長が隣に座った。もう一度膝の上に頭を――しかし、もしまた吐きそうになったら、と思うと怖かった。今度こそ部長を汚してしまうかもしれない。
「――寝転ぶより座って飲んでみるか。考えてみたら、大人になったら寝たまま何かを飲むなんて経験がないんだよな。だからむせやすいのかもしれない」
「あ……はい」
気遣いだということは嫌でもわかった。だってむせたわけではないことは部長だってわかっているだろう。
隣に座ると、背中に手が添えられた。さっき三上が吐き気を催したとき、体の上だというのにそのまま吐かせようと背中をさすってくれた優しい手。
覚悟を決めるように目を閉じてぎゅっと拳を握ると、部長に手を握られた。
「大丈夫だ。緊張はするだろうが、俺しかいない」
「部長……」
「これは仕事だ。それに俺は三上がこうしてミルクを飲んでくれるのをありがたいと思っているし、口外もしない」

（優しい……）

頷くと、そっと肩を引き寄せられた。唇に哺乳瓶の乳首が触れる。

（大丈夫、大丈夫――どうせ吐くものなんてない……）

～～～～

二日後――。

「朝食を買ってくる」

外に出るのは部長だけ。三上はいつもお留守番。オムツをしているし、お金もない――だからといって部長にばかり買いに行かせるのは申し訳ないけれど、そう言っても部長が「三上はお留守番だ」と優しく言うから、感謝を込めて頭を下げる。

「すみません、ありがとうございます」

部長が出て行くのを見送り、数分置いてから部屋を出る。

赤ん坊役をやっていても身支度は大事だし、楽しんでいてもこれは仕事だ。人気のない廊下を歩き、トイレに向かう。

洗面所はロールプレイルームにもあるけれど、たまの気分転換と運動も兼ねて、部長がいない時間はフロアのトイレ――もちろん排尿には使わないけれど――を使うようにしていた。

それに今は早朝。人に会うことはないはずだから、私服のまま部屋から出ることができる。

（部長、本当に帰ってないけどいいのかな……）

ぼんやりと顔を洗いながら考える。

さすがにそろそろ帰らなくてはまずいんじゃないだろうか。こんなに長い時間……もう二週間近い。もし一人暮らしだったとしても一度は帰るべき期間だ。

（やっぱり僕の方から帰るように強く言わなきゃだめだよな）

部長は三上に付き合ってくれているだけなのだ。本来、ロールプレイだってわざわざ泊まり込む必要はないものだったのに。

給料日は明日。口座の変更も対応してもらえたし、これでアパートを探すこともできるだろう。一度に日用品をすべて揃えるのは難しいかもしれないけれど、最低限のものがあれば十分だ。

頭の中で必要な物のリストを作りながら歯ブラシを終え、トイレから部屋に戻ろうとしたときだった。

「あれ？　三上？」

「え……？　あ、矢島！」

どうしてこんな所で――やばい。今ズボンの下はオムツだ。

「三上も残業……ってそれ私服？」

「あ、えっと、うん、」

なんて言い訳をしよう。部長も三上も、業務中にロールプレイルームから出るときはスーツに着替えて過ごしていたのに、まさかこんなタイミングで人に見られてしまうなんて。

でも相手が矢島だったのは幸いだった。事情を話せばきっとわかってくれるし、他言はせずにいてくれるだろう。

「まさか会社に泊まってんのか？」

「ああ、うん……」

「いつから？」

「え」

「なんか馴染んでないか？　シャンプーの匂いするし……それに私服なんて……持ち込んでるってことだろ」

「あ……うん、えっと……泊まり込みの仕事があって」

「いつから？」

「あー……えっと」

どうしよう。嘘は吐きたくないけれど、二週間近くなんて言えば問題になりそうだ。

「三日くらい、かな」

あとで部長に共有しておかなくては、と頭の中で考える。

「は？　なんだそれ……」

矢島から感じる戸惑い、混乱、怒り。

その反応を見て、三日でも長すぎることに気が付いた。

三上の異動が決まった際、矢島は残業がなくなったことを喜んでくれていた。そのために自分を犠牲にしてまで三上の仕事を引き継いでくれたのに――。

（言わなきゃよかった……）

失敗した。嘘まで吐いたのに。でも今は前のような強制的な業務ではないし、楽しんでいる。それに何より泊まり込みは三上の事情によるものだ。

「あのさ、矢島――」

しかしそのことを伝えようと口を開きかけたとき、矢島が三上の背後を見て大きな声を出した。

「都築部長！」

「え……」

振り向くと、部長がコンビニの袋を提げて立っていた。呼ばれたことに気付いて立ち止まったのだろう。視線もこちらに向いている。

最悪だった。まさかこのタイミングで戻ってくるとは。

「や、矢島！　あのさ、僕――」

引き止めようとする三上に気付かないのか、矢島はズンズンと部長に向かって歩いて行った。

「初めまして。経理部の矢島といいます」

「ああ……都築です」

部長は丁寧だった。突然の、喧嘩腰の自己紹介にもかかわらず。

「あの、矢島、僕は――」

「三上を家に帰してください」
「や、ちょ、矢島！」
やめてくれ、と思った。部長は三上を強引に働かせているのではなく、守ってくれているだけだ。ここに縛られているのはむしろ部長の方。
どうにか発言を止めさせるべく矢島の腕を引く。しかし矢島は「大丈夫だから」と穏やかな顔で三上に微笑み、きつい顔で部長に向き直った。
「三日も会社に泊まらせるなんて無茶苦茶ですよ。パワハラなんてレベルじゃない」
「違うんだよ、矢島！　話を聞いて！」
自分で思っていた以上に大きな声が出た。矢島の腕をもう一度引き、無理矢理こちらに向かせる。
「事情があって、部長は僕に付き合って泊まってくれているだけなんだ」
「何……？」
事情を話さないと、と思ったけれど、家庭のことは言いたくなくて。だから「今ちょっと家がバタバタしてて」と言うに留めた。矢島は優しいからそれだけでもわかってくれる――そう思ったのに、矢島の怒りは収まらなかった。それどころか、さっきよりも怒りが増しているようだった。
「どうして言わないんだよ！」
「え……」
「どうして言わなかった?!」
「あ……」
怒りの方向が部長から逸れたことはよかった。しかし矢島を傷つけたことを悟る。
「それなら会社に泊まるんじゃなくて俺んち来いよ！　俺一人暮らしだし、布団ならあるから！」
「いや、でもっ」
ここにいたい。部長といたい。部長にもっと世話をしてほしい。離れたくない――でも部長もいい加減帰らないと……帰れるようにしないといけないとも思っていた。三上のわがままのせいで部長が奥さんと仲違いしてしまったら大変だ……そう思いながらも一緒にいたくて、優しさに甘えていた。
ちらりと部長を見る。
部長は今何を考えているのだろう。これでようやく家に帰れると思っているだろうか。それとも――三上が矢島の家に泊まることを嫌だと思って止めてくれないだろうか、なんてあさましい思いが浮かぶ。
そんな自分が嫌で、恥ずかしくて。でもやっぱり嫌だと思ってほしくて。三上は部長の赤ん坊だから他の人間になんて任せられない、と思ってほしくて。
（馬鹿だ……）
自分の思考がおかしかった。三上は大人だ。ここでは仕事をしているのだ。
それに三上は、部長のものでもない。矢島は何も知らないのだから、世話を任せるかどう

かなんて考えるはずがない。でも他の理由でもいいから、仕事を片付けるためでも何でもいいから止めてほしかった。

しかし部長は矢島を一瞥した後、三上に向けて言った。

「俺もそろそろ少し休んだ方がいいだろうと思っていた」

「あ……」

突き放された……まるで矢島に向かってドン！　と背中を押されたような気持ちになった。しかし矢島は嬉しそうな顔で三上を見た。

「ほら。連日泊まり込みなんてだめだ。ちゃんと帰らないと」

「あ……でも、その……」

もしかしたらあとで何か言われるのかもしれない、と思った。「一旦連泊を止めるためだった。今夜はホテルに」とか。「矢島に詰問された手前、帰宅を許可する形を取っただけだ」とか――。

「三日も泊まり込みで働いたなら、もう仕事も落ち着いてますよね」

「……そうだな」

矢島が満足げに頷いた。

信じられない、信じたくない、という気持ちで視線を部長に移すと、部長もまた三上を見た。

「仕事ばかりではストレスが溜まるだろう。たまには友達と過ごした方がいい」

〜〜〜〜

「それと――オムツのサンプルがあがってきた」

部屋の端に積まれていた段ボールから取り出されたのは十種類のオムツパック。どれもかわいい絵柄が描かれている。この中から商品化するものを選ぶのだ。

「ターゲットは男性ですが、中には女の子のように着飾ってかわいがりたいっていう保護者もいるかもしれませんね」

「そうだな。ではこのピンクのハート柄は残しておこう」

「あとは……全体的に中性というか、どちらでもいけそうな柄ですね」

クマやウサギのような動物や哺乳瓶、星柄やアメなどのお菓子の絵柄。

「車が好きっていう男の子は多いですが……」

「それなら車がデザインされたものも発注するか」

「え……今からですか？」

「別にかまわないだろう。売れないものを作っても意味がない」

「このウサギやクマも十分売れそうですが」

「そうだな。三上には似合うと思う」

「……そうですか？」

かわいらしい柄が似合うと言われて嬉しくなってしまった。でもそんなこと、悟られるわ

けにはいかない。
「似合うよ。そうだ、オムツ姿の写真、撮っていいか」
「え……僕のですか」
「他に誰かいるか？」
「それは……」
部長に写真を撮られるなんて恥ずかしい。でも嫌ではなくて……体が勝手にもじもじと動いてしまう。
部長の中ではもう決定事項のようで、十種類のオムツを一枚ずつ取り出し、さっさとベッドに向かってしまう。慌てて追いかけ、隣に立つ。
「恥ずかしいです」
「大丈夫だ」
スーツは部長が脱がせてくれた。ロールプレイをしていたときの着替えみたい。恥ずかしいけれど、嬉しい。
「さあ、横になって」
今回用意されたのはすべてテープタイプのオムツだった。パンツタイプも作るけれど、今検証しているのはただのデザインで、機能性ではないのでかまわない。
「まずはクマのオムツから」
テープが留められると、丁寧にギャザーも直された。排尿するわけでもないのに――反射的に、下腹部がもぞもぞしてしまう。
「お尻をこちらに」
「は、はい」
四つん這いになり、お尻を上げて部長に向ける。
「顔は写さないから安心してくれ」
カシャッという音が聞こえた。その音が聞こえるだけで恥ずかしい。それに、一枚だけだと思ったのにカシャカシャカシャカシャと何枚も撮られた。
「前からも撮りたい。オムツ替えのときのように足を開いて膝を曲げてくれ」
「……はい」
言われたとおりにすると全身が熱くなった。だってこんなの、排尿していればラインがくっきりと見える姿勢だ。
「よく似合ってる」
恥ずかしいところはきちんと隠れているのに、オムツ姿と思うだけで恥ずかしい。
前面もたくさん撮られ、次のオムツに替えられた。

「じゃあ最後はピンクのハートの」
「はい」
濡れてないオムツが外され、ピンクのハート柄のオムツがあてられた。さっきと同じように四つん這いになると、また連写音が聞こえてくる。

「次、正面」
「はい」
十枚目となるともう慣れた。顔は写さないと言っていたし、足腰の辺りには個人を表す特徴もない――この体を見たのなんて、親と部長だけなのだから誰に特定されるということもないのだけれど。
写真が撮り終わるのを待っていると、部長がふとカメラを下ろした。
「――久しぶりに排泄してみるか」
「え……？」
「もうずっとしてないだろう？　濡れているところも撮りたいし」
「でも……」
それなら水を含ませたものを撮ればいいのに。わざわざ本当に排尿なんてしなくても。
「今日、出社してからまだ一度もトイレに行っていないだろう？」
二人だけの部署で、ずっと会議をしていたのだ。当然それくらい把握されていてもおかしくはないけれど――。
「三上」
「……はい」
返事をすると、ピロンという音がした。動画だ。
目を閉じて手をぎゅっと握る。体勢はそのまま、濡れていくところがすべて映るように――。
「んっ……ふ、ぁ……」
見られながらの排尿ももう慣れた。でも久しぶりだし、今は撮られている。こんなのは初めてだ。すごく……すごくドキドキする。勃起しちゃったらどうしよう、なんて思いながら尿を出す。
部長は終始無言だった。音声が入らないようにしているのだろうか。それとも普段から無言でじっと見られていたんだったか……思い出せないけれど、部長を意識すると恥ずかしい声が漏れてしまう。
「ぁっ、ん……」
排尿が終わった。ブルッと体が揺れると、またピロンと撮影を止める音がする。
「やぁ……」
排尿の終わりには体が震えると知られている証拠だった。恥ずかしい。
「ちゃんと出せたな」
部長の手がオムツを撫でた。濡れたオムツ越しにペニスを撫でられている。
「あっ……」
「このオムツ、一番売れるような気がする」
（え？）
なぜだろうと思いながらオムツを見ると――。
「あれ？　線じゃない……」

通常なら排尿したときに浮き出るライン。しかしそこにはそれがなくて。
「濡れるとハートが浮かぶようになってるんだ。排尿でハートが出るなんてかわいいだろう」
部長はかわいいと言ったけど、感じたのはいやらしさだった。だって尿で赤いハートが浮かぶなんて。それもたくさん。まるでそこを――いやらしいところをハートで着飾っているかのよう。
「かわいすぎてオムツ替えがしたくなくなってしまうな」
「や、部長」
「わかってる。ちゃんとオムツかぶれしないように替えてやるから」
もうロールプレイは終わっている。今回は撮影のためにしただけなのだから、自分で脱げばいいだけだ。しかし部長はおしりふきを取り出しテープを剥がした。そして外気に触れて小さくなるペニスを持つ。
「あっ……」
沐浴では何度も洗ってもらったペニス。オムツ替えのときだって、雑誌には「男の子の場合は排尿だけなら拭かなくていい」と書かれていたのに、部長はいつも丁寧に拭いてくれていた。だから触られるのは何度も経験しているのに、今でも慣れない。
（だめ、起っちゃうっ……！）
「ハートで感じたか」
部長が笑った。手で持っているのだから当然すぐに気付かれてしまう。
「すみません……」
「いや。赤ん坊も勃起すると言っただろう」
「それはそう……ですが……」
でもそれは生理的なもので、性的なものではない。部長だってこれがどちらによるものなのか、わかっているはずなのに。
そのとき突然、部長がツンと起ち上がったペニスを突いた。
「あっ！」
ドクンとペニスが脈を打つ。しかし部長はただ子供のペニス（・・・・・・）で遊んだだけだったようだ。
「ほら」
腰を持たれ、新しいオムツがお尻の下に敷かれた。
（あれ？　え……？）
もう最後の一枚まで撮り終わったはずなのに。
「白いの、お漏らしするかもしれないだろう」
部長がテープを留めた。勃起を下向きにされるだけで感じてしまって窮屈なのに。
「やっ！　し、しません」
「そうか？　だがもししても替えてやる」
精液のお漏らしなんてありえないのに。それにここは会社だ。オナニーだってするはずがない。

「しないですっ！」
しかし部長は三上の声など聞こえていないかのように言った。
「今日は一日、オムツをしたまま過ごせ」
「え……」
もうロールプレイは終わったはずなのに。
「いつ出してもかまわない」
「白いの……ですか？」

〜〜〜〜

「もう一度勃起できるか」
「あ……」
「ん？」
「もう……し、て……」
手で三上の股間に触れると、かわいいらしいそれはゆるく立ち上がっていた。素直な告知。
「いい子だ。助かるよ」
ズボンのベルトを外し、ペニスを取り出す。三上のそれと重ね、一緒に握ってこすり合わせる。
「あっ！　あ、んっ」
「三上」
視線だけで哺乳瓶を示すと三上は震える手でそれを取り、必死に吸った。興奮する。なんてかわいらしいのだろう。今都築は、一生懸命ミルクを飲む赤ん坊のペニスとこすり合わせている。
（まずいな……すぐにイきそうだ）
でももうしばらく楽しみたい。今日のこの一回限りというわけでもないのに、それでももったいなくて射精したくないと思ってしまう。
加減しながら楽しんでいると、目に涙を浮かべた三上が困ったような顔で都築を見上げた。なんとか哺乳瓶を咥えたままでいようと頑張っているのがわかったので、手を止めて哺乳瓶を外してやる。
「どうした？」
「また……お漏らし……」
弱々しい声。それがまたペニスを刺激する。
「オムツに出したいか」
「はい、オムツ……お漏らししちゃうから、オムツしてください……」
小さな声のおねだり。思わず射精しそうになるのをぐっと堪え、先ほど三上が濡らしたばかりのオムツで二本のペニスの先端を包む。
「あ……」

一緒に刺激したかったので、都築のペニスは外さなかった。二つの尿道口を覆ったまま竿を扱く。
「あっ、あ、あ！」
そろそろイくだろうなと思った瞬間、三上は自ら哺乳瓶の乳首を咥えた。必死に目を閉じてミルクを嚥下する。
（俺が興奮するとわかってるのか……）
その健気さに、手のスピードが上がった。都築自身の射精欲も一気に湧き上がってくる。
射精はほとんど一緒のタイミングだったように思う。先に三上が射精し、その上に都築が精液をかけた。
（はまりそうだ……）
変態的な射精。こんなことをしたのは初めてだった。けれどもうやめられそうにない。
「三上、大丈夫か？」
二本一緒に残滓を搾り、オムツの汚れていない部分で亀頭を拭う。
「ぶちょ……」
どうやら数回ミルクをこぼしていたらしい。三上の口周りはミルクでべちゃべちゃになっていた。その姿に思わず笑みがこぼれる。
「ほら」
まるで舐めてと言うように三上が上を向いたので、頭を抱き、滑らかな肌を舐め清める。
「ン……あの……部長」
「ん？」
「甘いのにすみません……」
一瞬、何を言っているのかわからなかった。しかしすぐ、三上好みの味では甘すぎると言ったことを思い出す。
「そうだな。三上がこぼしたやつだと思うと余計に甘い」
真っ赤に染まった顔をもう一度舐める。それから唇に吸い付くようなキスをすると、三上はふい、と顔を背けた。
「三上？」
「見ないでください」
「見ないと世話をしてやれない」
「今は何も……」
今は――その言葉に含まれた本音がかわいい。
「体が落ち着いたら、俺のうちに行かないか」
「え？」
「ここだと思うように世話してやれない」
「あ……いえ、すみません」
シュンとした声。まさか断られるとは思っていなかったので、頭の中が真っ白になる。
いや、もしかしたら部屋を蔑んだと思ったのかもしれないと一縷の望みをかけて問う。

「……それは断るという意味の謝罪なのか」
三上はゆっくりと頷いた。
「僕……多分部長の家に行ったら奥さんのこと思い出しちゃうと思うんです」
「ああ……」
そんなこと、意識すらしていなかった。思い返してみると、そういえばまだ詳しいことを話していなかったことに気付く。
「誰にも言ったことがないんだが――」

嘔吐表現がありますのでご注意ください。
ハピエンです。
おしゃぶり咥えたままセックスします。

打ち切りにならなければ2も書きたいです。
2で書く予定……？
・貞操帯
・職場で同僚がいる中でのオムツ排尿
・排尿練習
・恋のあれこれ〇

約１４万５千文字です。１６５ページあります。長いです。
よろしくお願いいたします！

商品開発部・育児グッズ課　サンプル
gooneone（ごーわんわん）
2021/ 6/ 11
メール:gooneonegooneone@gmail.com
pixiv：19591291
Twitter:@gooneone11

ちるちる:gooneone